

の写真撮影とあわせて進行させてきているが、近世中期にいたる土地台帳類の撮影は完了した。ここでは寛永18年の永山村検地帳の概要を報告する。

寛永18年8月の永山村検地帳は本田帳と新田帳の2冊からなるが、その表紙は前者が「常陸国行方郡長山村御検地水帳」、後者が「常陸国行方郡長山村新田御検地水帳」となっている。検地役人は三野半左衛門ほか3名で、同年の牛堀村の検地と同じである。本田帳は1332筆からなっているが、耕地面積の合計は64町7反6畝27歩(612.547石)で、その53.6%が田、33%が畠、13.4%が屋敷であり、田はその21.4%が上田、32.4%が中田、45.5%が下田、0.7%が下々田、畠はその29.4%が上畠、24.1%が中畠、41.3%が下畠、5.2%が下々畠となっている。新田帳は303筆からなるが、その合計は下田2町7反8畝4歩(25.032石)のみとなっている。

長山村の耕地面積規模は牛堀村の2.6倍近くあるが、田勝ちな村であること、また田では中田・下田及び畠では中畠・下畠が多く占めていることでは牛堀村と共通している。屋敷地の筆数は98筆だが、その中には牛堀村の寛永検地帳にも現れている源之丞(須田家)の名前も見出せる。村内構成ははじめ源之丞の村内での位置などまだ不明であるが、長山村の寛永検地帳の分析検討をはじめ、須田本家文書中の土地台帳類を中心とした再検討から改めて近世の村の確立過程を捉え直すことが当面の課題である。

#### 茨城県行方郡牛堀町旧須田家文書の研究

門前 博之

An Examination of the Documents of the Suda Family  
in Former the Ushiborimachi, Namekata County,  
Ibaraki Prefecture

Hiroyuki KADOMAE

茨城県行方郡牛堀町の須田家文書の研究は、幕末維新期に焦点があてられてきた。しかし、須田家文書のなかには写しではあるが、寛永18年8月の牛堀村検地帳をはじめとして近世中期にいたる文書が比較的多いように思えたので、確立過程における近世の村研究の私の検討対象の一つに選んだ。その後における須田本家文書の発見は、その課題の検討ということより、文書目録の作成作業へと向かわせ、検討そのものも年貢関係文書や漁猟出入りなどに興味に移ったが、須田本家文書のなかには寛永18年牛堀村検地帳の原物はじめ永山村の寛永18年8月検地帳のほか近世中期にいたる土地台帳類があることは既に指摘した通りである。私の須田家文書の研究も牛堀・永山両村の確立過程やその後の変化・発展を改めて捉え直す時期にきているように思われる。文書検討は文書